

<巡検報告>(1) 拜島附近及加住丘陵巡検記

植田, 忍

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学研究室

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

34

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

1950-07-01

① 拜島附近及加住丘陵巡検記

植田 忍

新井先生御指導の下、一行二十名は青函線拜島駅に下車し、先づ瀧山城址に向つて出発した。

駅附近は台地状の平坦面であるが駅前通りから道を南にとる頃から極、程やかな下り坂となり拜島村、中心聚落附近に至ると一帯の水田となっている。之は多摩川左岸の段丘面である。又此の聚落は旧宿場町の形態が残存していて、各家の地割は馴一であり入母屋造りの家屋が多く、尚禰を道路に掛けて居作ら側面の「オモテ」に玄関口を有しているのも面白い。

此所から急崖を下りて多摩川に出で対岸加住村を眺めると前面の瀧山丘陵は突によく崩った平坦な頂上を以つて延々と続いている。多摩川に通じている斜面は急崖をなし所々にV字状の支谷が丘陵深く喰込んでいる。更に夜割の仮橋を渡つて筆部郷に出る。此所は丘陵の麓に任り耕地としては極、狭少な段丘面しかないので、先の仮橋を渡つて拜島村へ出作りする者が大多数である。尚雨季、河水の増水する際は仮橋を引揚げ、東秋川、多摩川の両鉄橋を迂迴して耕作に往復すると云う。此所から城跡へは約十五度の急坂を上る。此の城跡は中壘のもので八王子の旧城であつた。今にして思えば大した事もない様であるが当時は相当要害堅固なものであつたらしい。現任郡民のリクリエーションのハイキングコースになっている。それよりも此所から対岸を望むと先の多摩川左岸の段丘状態が一望の中に眺められる。

晝食を終えて中丹木に下る。中途谷地川が樹枝状に数回の支谷を分岐し丘陵は細かく刻まれているその細長い深い谷や擦せた尾根の状態並に乱伐に近いまでになっている雑木林の櫛子等を見る。

中丹木では谷地川に沿つて村を貫いている道路があり家屋は入母屋造で丘陵の裾、即ち山林と畑との境に線状に配列し南向きになつて日射を充分受ける位置にある。之は山麓の湧水を利用する爲であり何れの屋敷にも建樹を綺麗に刈込んでいるのが見られる。此所から更に丘陵を越えて谷根川の各鎮に出る。此所には原野開拓の模式的段階を如実に見る事が出来た。

愈々谷野部郷に差し地割図と現地とを対照しつつ耕地と所有地並に屋敷及墓地との關係、其他既述處による旧地割の變化等詳細に知る事が出来た。これより大子市に向ひ八王子駅で解散し新井先生の御指導を感謝しつつ帰宅した。